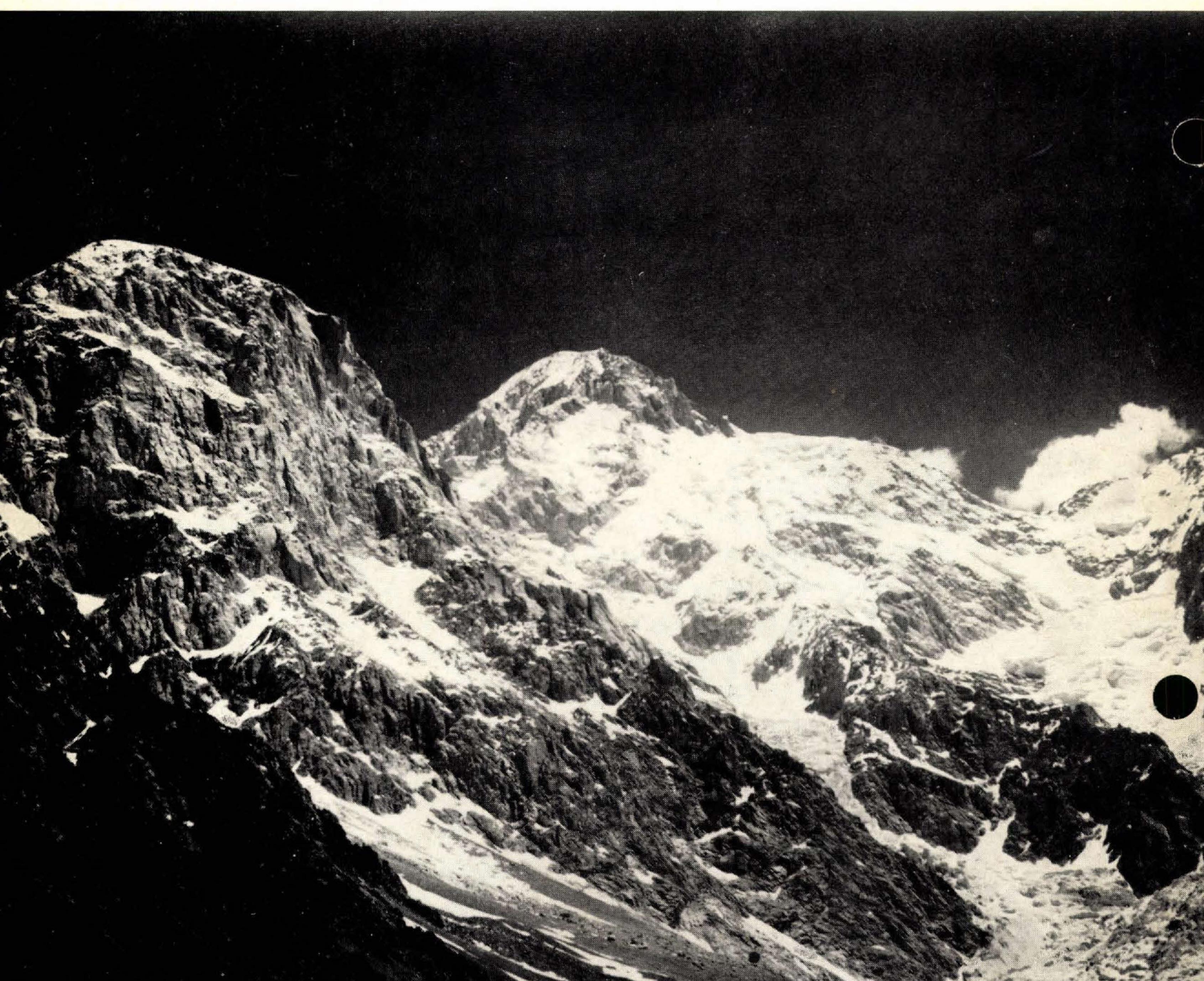


針葉樹會報

復刊第24号





発行日 1969年3月1日	針葉樹会報 復刊 24号	編集人 東京都台東区台東 3-20-6 平川紀男
発行所 針葉樹会社		
印刷所 錦光社		

山伏岳

中川孫一

ぶろろぐ

これは親子登山である。翁樹会のメンバには、蛙の子は蛙で、件をポーターにしてというパーティが少くなっている。「静岡の山に登るときは僕が案内するよ」と静岡在勤の三男が宣言した第二号（第一号・十枚山）である。

新幹線の余沢とはいえ、東京から僅か三時間あまりで、

このように静かで美しい山があることは、登山のみが与えてくれる醍醐味であろう。

峠道

五万南部を広げて、安倍川を源流地点までつめてゆくと、巨大な崩壊地に突当たる。日本三大崩の一といわれる大谷崩である。その頭から尾根を南下すると、二〇一三米の三角点がある。これが山伏岳で、安倍川流域唯一の二〇〇〇米峯である。そこからゆるやかな降り尾根があり四キロ続く。注視すると一面の笹記号がある。これが山伏の特長であり、美しさであり、楽しさである。尾根の末端には一八〇〇米近いピークがあつて、道は牛首峠へ急降する。

大谷崩の麓は、大きな扇状地を形成して梅ヶ島新田の

部落を抱いている。牛首峠の道は、新田部落を奥へ奥えとつめて、西日蔭沢を渡つて、いきなり尾根の急登となる。井川への古い交通路のこの峠道は、忠実な九十九折で、グングン高度をあげ、約一時間で岩下の鞍部に達する。こゝから峠までは、ずっと右山となり、幾つかの小沢を渡るので、次から次と水場が現われてうれしい。

左手は、コンヤ沢の深い谷間だ。

峠から、向いの尾根越に、白雪に輝く巨峯が、胸から上をのぞかせていた。聖だろうか。

笹ルート

峠からは、四つ足（？）の直登が約二〇〇m続いた。何度か立停つて息をつぐ。頂上直下の小さなザラ場にザックを投げ出す。聖が全容をあらわし、上河内、茶臼、光、大無間の稜線がクッキリと西空を劃している。双眼鏡に茶臼の小屋が白く光って映る。

頂上は肩までの深さの笹にビッシリ蔽われ、その中を一条の踏跡が北へ続いていた。七合目まで真白になつた富士が、碧空の下に、美しい裾野を引いて、そびえていた。

笹の道は、所々巨木を支えながら、延々と北へ北へと続き、緩く降るかと見れば、又緩く登り、庭園の芝生か、ゴルフコースを歩くよう、山上のプロムナードである。この笹ルートは、猪ノ段と呼ばれる。安倍川流域の山地では、山中の高原（平地）を“段”と呼ぶならわしがあ

る。南部図幅には、幾つもそれが見えている。

筍は、進むにつれて丈が短くなり、膝頭に達するころ、広い筍原に出た。原の中央に立枯の巨木が白く光っている。前面に、崩壊地を抱えた筍山（丘）が、私を見下ろしていた。雁坂の南面を想い出させる山容だ。

立枯の巨木の根方に近く焚火の跡があつた。私達親子は、そこに猪汁（前夜泊った梅ヶ島温泉から用意してきた）の宴を開いた。

黒い猟犬を牛頭に鈴を肩にした二人連の獵師が

「御馳走ができますを」

と声をかけて通りすぎた。この二人が、今日

中にめぐり合つた唯二人の人間だった。それほど安倍川の山は静かなのである。抜けるよ

うに晴れ上つた青空からは、十二月とは思えない暖かい日射が降りそゝいできた。北方の白い巨峰は荒川三山だろうか。

大観

筍原から頂上えの道も、絨毯をしきつめたような筍の道だった。見渡す限り立枯の巨木が点在し、その二世を育てるかのように、師走の花屋の店頭を飾るクリスマスツリーのようを櫻の若木が、筍の間から半身を出してい

た。

頂上（二等△）の大観は、七時間の苦登を十分に償ってくれるものであつた。東方は、

凄絶な大谷崩を前景に、十二夜の月を真上に

仰ぐ初冬の富士が、七合目あたりまで雪をき

て、裾を遠く夕靄の中に没して、夕陽に輝いていた。西方は、荒川三山から赤石、聖へと

続く三〇〇〇mの白銀の巨峰が、上河内から

大無間に続く山なみを従えて、空際線を画いていた。チラリと鋭い尖峰をのぞかせている

のは北岳であろう。

大観を撮りつくしたカメラの針は、ファイルムの最終を示していた。

逆落し

新田への下山路は、頂上から東南に張り出

した尾根を、まっしぐらに下る。西面の筍と

はうつて変つて、秩父を思わせるような黒木

の立ちならぶ徑である。もう日没までまだある。谷間はそろそろ暗くなりかけてきた。

足許の明るいうちにと急ぐ。四十分（約四〇

〇米）も下つたころ、小さな鞍部に出た。こ

から、右山に変つて、西日蔭沢の源頭に出る。樹種も雑木となり、一派人間臭を感じる。

沢は段々太くなり、わさび小屋を見るように

日 次

山伏岳 中川孫一 近藤恒雄

今年の登山 村尾さんの杖と天狗平

—穂高岳懇親山行— 柿原謙一

針葉樹懇親ハイキング

森脇君一家のこと 加藤健一郎
名古屋地区新年会 佐藤久尚

吉沢一郎

山行消息（昭和四十三年）

中川孫一

*

会員の便り(1) (2)

*

会務報告

(12)

(11) (7)

(10)

(8)

(7)

(5)

(4)

(3) (1)

なつた。陽は落ち切つて足許は暗い。右峯の道が沢を渡渉すると、そこにトラック道が待っていた。三角コースの一辺とはいえ二時間で下り切つて我ながらおどろく。十二夜の月光が、広い川原に、白くのびるトラック道を

クツキリと浮かびあがらせていた。

「お父さん、あそこに今朝通つた作業小屋がして十七回の登山となつた。今振り返つて見見えるね、もうじきだよ。」

間もなく、今朝乗りすてたキャロルの白い車体が、左手に見えてきた。

今年の登山

近藤恒雄

今年は十二月櫛形山釈迦ヶ岳を一昨日終了して十七回の登山となつた。今振り返つて見

岳会員や其他の人々と山行を共にした。誠に

今年は十二月櫛形山釈迦ヶ岳を一昨日終了して十七回の登山となつた。今振り返つて見

岳会員や其他の人々と山行を共にした。誠に

今年は十二月櫛形山釈迦ヶ岳を一昨日終了して十七回の登山となつた。今振り返つて見

えびろぐ

安倍川の山は、登山人口の少いこともあって、文字通り清浄無垢である。十枚山も山伏岳も頂上は短い筈である。それが一段と山を美しくしている。奥多摩や丹沢の筈は深くて登降は難波をきわめる。早春、初冬の安倍奥の山は、雪の南が、すぐそこに見えて楽しい。

七月 ① 柳澤峠より黒岳迄

八月 ① 三国峠、赤澤山
② 燐石岳経塚山

九月 ① 早池峠山、五葉山

十月 ① 富士山御中道巡り

十一月 未丈岳
① 藥師岳越中沢岳五色ヶ原一の越



十二月 櫛形山、釈迦ヶ岳

七月の五葉山以外は天気も良く全部気持の良い山旅であつた。同行者諸兄を調べて見ると村尾十六回藤島六回深田・望月・坂本各四回川喜田・川崎各二回、其他十九名の日本山岳会員や其他の人々と山行を共にした。誠に楽しい思い出の山積である。特に村尾兄とは終戦後小生東京転勤以来山行を重ねる事実に八十五回になつた。明年中には百回になる。百回記念には何処の山へ行かうか今から楽しみである。

登つた高さ（実際に足で）は合計二四、五

一七米突で小生の登山史では最高である。登つた山は四十二山、越えた峠二十二であった。勿論名無しの山や峠は此外若干あつた。

今年はどの山も良かつたが特に五月の笈ヶ岳六月の焼石岳経塚山から夏油温泉に出た山旅は永く印象に残るであろう。静かな人気のないそして山が奇麗で屑一つ見当らない山路を好きな仲間と登る楽しさ全く恵まれて居るの一語に尽きると云え様。

表紙写真説明

Dir Gol から仰いだ HIRATE Mts(七,七〇八メートル)
及び Dir Gol Noto(六,七七八メートル)

撮影 鈴木政孝氏（東海大）
吉沢一郎氏 提供

村尾さんの杖と天狗平

—— 穂高岳懇親山行 —— 柿原謙一

昨年の九月のこと、また徳沢に集るという連絡があった。でかけることにする。村尾さんにお電話すると徳沢泊りで天狗池に登るという。同行することにした。

廿一日の夜は、新村橋の奥又白側の川原に天幕がはられて、若手会員とともに梓川の瀬音をなつかしむ。廿二日村尾さん、中村君と学生宮武君に小生の四人、槍沢にむかう。快晴である。屏風岩から前穂に伸びる山稜は美しい紅葉にそそりたっていた。若い中村・宮武両君は、ピトンもザイルもない山行にいささか当てがはづれたかと、私は恐縮した。

横尾山荘から一ノ俣小舎の間では原生林が以然として美事だし、岩魚が釣れそうである。

槍沢小舎は新築されており、旧い小屋跡で世余年前の山行の憶い出がよみがえってきた。槍沢の草つきの台地で、爽かな秋冷の空気をすいこんだ。宮武君曰く「ゼミの先生宅に電話して、山に参りますのでと奥様に申しあげたら、奥様が『先生によろしくお伝えします

ヨ』とのことでした」と。木戸御免とは、このことである。

曇り気味の天気となる。灌木が真赤に紅葉して、秋まさにたけなわの天狗平に着く。槍ヶ岳が目の前にそそりたつて、常念の姿にみとれる。若い御夫婦が二組、池の向ふに天幕を張った。卅年前の槍沢とは、大きに異なったムードである。

中村君と宮武君が天幕張りから夕餉の世話をまですっかりやつてくれている。天狗平を散歩しながら村尾さんと語る。

このとき私ははじめて、村尾さんがいつも山行のとき持参されるステッキの由緒を聞いたのである。

村尾さんのアノ杖は、日石の二代・三代・四代社長相伝の杖であった。堀江会長（四代社長）が急逝されて荼毘に附された夜、村尾さんは山に持つてゆくステッキとしてアノ簾の杖を御遺族から預いた。前に会長から預いた登山用のソフト帽に加へて、杖がそろ

つたわけである。私は昭和四十年九月村尾さんと雲取山で遭った。翌四十一年十月折本一雁坂峠—甲武信—十文字峠の旅を御一緒についた。昨年は奥又自行をともにした。あのとき持参された杖がそれである。「この村で百回目の登山が果せたヨ」。槍ヶ岳は暮れゆく秋の夕べに黒ずみ、西鎌尾根側の空は茜色をおびて雲はしきりに去来していた。そして第百回目の登山は、堀江会長が生前に行つてみたないと申されていた赤沢林道で果すことができたと、村尾さんは語られた。

杖の由来を社内報に書いたから、そのうちに回覧するよ、と村尾さんは云ふ。天幕に入れる。夜、雨が降る。明日は晴れるだらう。廿三日、お彼岸の中日。素晴らしい快晴である。雪渓の水でできている天狗池に、槍の姿が美しくうつっている。燃えるような紅葉。燕・大天井・常念を指さす。南岳から中岳の稜線に美事な圈谷。中村君は早朝槍沢を降る。本当にお世話になつた。村尾さんと宮武君は北穂へ向ふといふ。私は中岳から槍を廻つて下山しようかと思ふ。三人で南岳への瘦せ尾根を登る。

横尾尾根に立つと、みおろす本谷右俣のカールは黄一色の明るい紅葉に飾られていた。

そそりたつ北穂は勇大で、北尾根の諸峯に白雲がわいてくる。宮武君はねむたそうである。私はこの圏谷を降って横尾山荘に向ふことにした。村尾さんもそのコースをとられた。それでは一寸飛弾側を眺めてからと、二人で南岳—中岳の稜線に登る。雲の上の笠の姿も卅年ぶりのこと。その左に白山が浮ぶ。

宮武君が仮眠している横尾々根に引返し、三人で本谷右俣の草付きの急斜面を降った。「こんなのがんびりした旅ははじめてです」と宮武君は語る。「僕はいつもこんな山旅がすきだ」と答へる。涸沢の出合で休息し、横尾山荘まで一気に歩く。ここで飲んだピールの味は素晴らしかった。若いお二人にお世話になつたことも喜びであった。

帰宅してから、あゝ胸のすくような秋の山旅であつたと回想した。間もなく村尾さんから石油荷役社の社内報が回覧されてきた。村尾隨筆「故会長の杖と百回登山」が掲載されていた。藤島大人の感想が横書きされている曰く、石油荷役という会社のことは良く知らないが、かかる人材をもつ会社の繁栄は疑ひながるべし、といった調子であったと記憶する。私は名言だと思った。雪渓の水があつまつてできた天狗池、その池から音をたててせせらぎおちる水の音、爽かなる自然と人の心が私の胸の奥底にしみこんでくるのだった。

針葉樹会懇親ハイキング

山本健一郎

プロローグ

眼の廻るような年末のいそがしさの中で、電話のベルがリリーンと鳴る。「針葉樹会の○

「様からお電話です」と交換手の声が告げ、

「こんなのがんじりした方にこしめてです」と宮武君は語る。「僕はいつもこんな山旅がすきだ」と答へる。涸沢の出合で休息し、横尾山荘まで一気に歩く。ここで飲んだビールの味は素晴らしかった。若いお二人にお世話になつたことも喜びであった。

ますと言ひながら、自然に当田のたのしい様子を想像してニコくしてしまう。これだけの顔がそろった山登りどんなかたのしかろう。家族連れも多く、夏の五色ヶ原行で味を占めた二世の参加もあって大盛会ぢやないか。こうなれば自然準備に当る幹事もはり切らざるを得ない。一同頭を寄せ合つて昼には豚鉢に熱燗の一杯も出そうではないか。ビールも欲しいしなど大パーティをどこかの日溜まりで開くべく大童わとなつた。年が明け、暖か

くのどかな日が続いていたが、北アの大量遭難の記事がようやく新聞から消えるころになって天気があやしくなってしまった。それでも準備を一応ととのえて土曜をむかえたがはつきりしない天気である。何とか降りさえしなければと思い寝についたが仲々寝つかれない。まるで小学生の遠足前夜のような有様でした。

× × ×

明くる十二日早朝、十年余のサラリーマン生活の悲しい習性が身について、六時半にパツと眼がさめたが馬鹿に暗い。外へ出て空を見上げる風情なんかサラグラール・アタックの朝もかくやと思われるいきおいでしたが天気ばかりはどうにもならず、ポツく来る気配。早速五日市の住人、中村君（山行担当幹事）に電話をするも矢張り情況香しからず、福生の住人柴崎兄とも相談、一週間延期することにした。ともあれ参加予定の会員のお宅に連絡をはじめ。先づは、一番早くお宅を出そうな銀座の岩崎さん、統いて鈴木さん。鈴木さんは丁度玄関で仕度中とか、タッチの差で間に会った。皆残念そうな声を出しておられるので、今日の計画をずい分たのしみにしていらっしゃったのがよくわかる。次々と

指先が痛くなるまでダイアルを廻しつづける。

「モシく佐野さんのお宅でしようか」「針葉樹会の幹事の山本と申しますが」「ハア、アツもうお出掛けになつたのですか、ハイわかりました」ウヘーイ、矢敗つた。ほかにも連絡のつけられない会員が出て来る。さてそりでは八王子へお出ましだ。ピッケルがありつける。横浜線は六三型のボロ電車、しかも単線運転のため、各駅で待ち時間が多くて猛烈に寒い。その上とうとう本格的な雨になつてきました。

八王寺の駅には佐野さんとその二世、柴崎も二世連れ、それに佐藤(之)、中村が集まり折角ここまできたのだから高尾へでも行こう。佐野・柴崎の運転する車に分乗、浅川まで向つた。雨の中を高尾山のケーブルカーが登つていいくと雪に変つた。参拝の客に混つて雪の中を奥宮にもうで、頂上を目指す。こんな雪の日でも、日暉日とあつてわれくのほかにも登つてくる人々がある。二人の二世も雪に大喜びで歩いている。頂上についたが雪で全く何も見えない。頂上の休憩所で早速豚汁に一杯となつたが中村君のリックザックを探せども肉の包みは出てこない。浅川に置いてき

た車の中に置き忘れと判明、皆に野次られつ
つ野菜の味曾煮の準備にかかる。佐野さん提
供のコーンビーフでとも角も形をなした野菜。
の味曾煮で満腹となり、雨の浅川の町へと再
びケーブルカーで降り、解散となりました。
山芋を買って、頂上で喰べそこなった豚肉を
お土産に皆それぞれの家路へ向いました。
さて、本番の十九日は、幹事佐藤君の筆
によりご報告することといたしました。

陣馬山 景信山

十九日は先週とは打って変つての好天氣。九時、八王寺駅北口に集合した会員は、中川近藤大先輩をはじめ佐野、佐野さんの御子息山本(健)、佐藤(久)、中村(雅)、宮武(学生)の八名。一週間延期されたため、都合が悪くなつた人が多数でたのは残念だつた。

当日、中川先輩はわざわざお燭の道具を持参され、陣馬山頂では特級酒をお燭して皆にふるまつて下さいました。山で酒を飲むことは多けれど、お燭をして飲んだ経験は初めての若手は、この芸の細かさに大いに感心しました。佐藤(久)などは早速これを真似して、お燭の道具をデパートで搜し求

エピローグ

といつた具合で、お正月の懇親登山、日帰えり、家族連れの手軽さに静かな山登りができるだろうという期待もあってか、意外な人気でした。ただし、悪天にたたられ、本番のときには僅かな人しか参加できなくなってしまつたのは残念でしたが、この種の企画も年に

(次頁下段に続く)

会員の便り(1)

身辺

増山清太郎

一九三〇年に旧商大本科が国立に移ったのを機縁に、三十八年間を中央沿線に住んだ。処が場所が青梅街道に近くて空気が悪くなつたし、南隣りがアパートになつて陽

当たりが悪くなつたし、家屋も痛んできたので、こんどはマンションなるものに移つた。目黒川を見下す高台の九階だから、陽当たりと空気は、当分確保されるだろう。

目の下のハンガリ大使館の庭には、玉川上水を引いて、せせらぎを聞かせ、池には鯉が遊んでいる。ネオンが美しい。

晴れた日には、富士山・秩父連山が眺められる。鹿野山が見えるという人もいるが、これは怪しい。

室は旅館に毛を生やした程度のものだから、「目黒川温泉」と自称している。

町会や隣組が無いようだから、サッパリしていい。

一室おいて隣りに高名な女流教育家が住んでいる。遊びに来た四、五才のお孫さんに、それとなく他人に迷惑を掛けぬことを教えているのは流石である。

池知昭洋

春立つ頃となりました。山岳部諸先輩、

学生の皆様、如何おすごしてしようか。

パキスタン遠征の際には、一方ならず御世話になりました。あれから既に一年半、如水会館のロビーでは次の海外登山の話が進んでいるようです。

私も就職しまして半年経ちました。今では、一時間半の通勤が苦にならない程に体力も回復しております。今年の正月は皆様の御誘いを受けましたが、いささか無理を

感じ、連絡本部の汚名に甘んじた次第です。しかし、一年に一度も雪の山を見ないと云ふことは思つたよりわびしいものでして、

ついに、やむにやまれず、シーズン最後の氷壁を眺めるだけでも……と今から胸をワクワクさせております。

アレヤ、コレヤと一つ一つ思い出しながら、用具を揃えるのも仲々楽しいものでして、久しぶりに登る前の、アノそわそわした気持ちを味わっております。

一、二回は悪くないなと思います。

山から遠ざかつて久しい人も気軽に参加出来るような試みをきっかけに是非山登りを復活させていただきたいものです。

名古屋地区新年会

名古屋近辺在住の若手O·B七名は、一月二十三日夜、名古屋市中区柳橋のグランドビルにて新年会を催した。

(出席者)

鈴木克夫、大橋喜治、宇田川徳治、白井弘

中橋寿雄、半場三雄、加藤正己

出席者七名はいずれも名古屋地区を代表する高徳の紳士であったから、親しきなかにも礼節の序を忘れず、格調の高い新春放談会であつた。また今年は、会員相互の親睦を計し我国登山界の発展を期するため、多くの山行を行なうことにし、その第一回目の山行は二月中旬に、御在所岳藤内沢あたりに出かけ、春の訪れを知ろうということになつた。

森脇君一家のこと

吉沢一郎

昭和三六年の九月、リマの日本大使館から私達の泊っているホテルへ、ニュー・ヨークからの電報が届けられた。開けてみると、森脇芳之君（昭和一三年組だから、仲間には松浦、小林、望月の三君がいる訳だ）からもので、アメリカ山岳会のNY本部で皆が待つてゐるから、簡単な話を用意してきて下さい、という文言であった。AACの小集会が丁度あるからその席で演説をぶてというのである。

えらいことになつたとは思つたが断わるのも山男らしくないので承知の返事を打つておき、それから四、五日ホテルの部屋でねじり八巻きで、一所懸念演説の原稿を書いた。

九月の何日だか忘れたが、リマからパナマ、マイアミ、ワシントン経由でNYにつくと、森脇君その他の人が迎えてくれ、甘利君が一緒だつたが何処かへ消えたので私一人、森脇君一家の住むラーチモンへ連れて行かれた。

NYは生れて初めてだつたが、森脇君一家

の人々にお会いするのも初めてであつた。私にはあわただしい滞在であつたが、おばあさん、奥さん、お子さん達の親切は身にしみた。私の演説原稿は皆さんにもみてもらつたが、ますますの出来だつたらしい。あの時は、チャールズの親父のオスカーワードさんに会つたことが印象的であつた。

あれから七年経つて私は再びNYを訪れた。今度はスペインのマドリードからであつたが、ところは違つても塔乗地点での見送人が同じ三菱商事の塩川支店長であつたということは誠に妙な因縁である。

アンカリッジ、アムステルダム、フランクフルト、サアツブルグ、インスブルック、ミュンヒエン、シュタイア、シュツットガルト、チュービングен、ゲッビングен、ロンドン、

ノース・ウェールズ、マドリードを経て來た私は、もうそろそろ草臥れてきていた頃ではあつたが、ケネディ空港を出て来て森脇君の相変らずの顔を見た時には本当にホッとした。

一〇月十五日の午後五時（現地時間）である。但し私の時計は午後の九時になつていた。今日も又睡眠不足が待つてゐるのだ。

ロングアイランド・サウンドに近いラーチモントのお宅へ入つたら、家族構成は少し、前業し、目下はロス・アンジエリスのパサデナ・

とは違つていた。

まずおばあさん（森脇君の母上）は相変わらず白髪で元気、八五歳といふから大したもの。一〇何年間一切英語は使わずに通してきたと、いう意志堅固な女性である。細かいところに気を配つて下さつて本当に有難いと思つた。

次は奥さんのかずこさん。お年は知らないが七年前と少しも変つていない。現在は生長

の家のNY支部長、草月流生花の師範で、茶は裏千家、謡曲も熱心という多趣味だが、英語の夜学に週二、三回通つておられるには驚いた。實に精力的に活躍しておられる。私のためにお寿司をこしらえたり、自動車を運転して下さつたりで、全くえらいお世話をかけてしまつた。

今度は家にいなかつた男子が二人、一人は長男芳治君（25）、MIT（マサチューセッツ工科大学、これはアメリカで一番難しい大学この学校へ入つて皆について行けず他校へ移つた人が、そこでは優等生になると言つた具合である）卒業後（しかも特待生となつて親孝行をした）NY大学の工科大学院を修了、目下は米軍に勤務中。

次男の洪興君（23）も特待生でMITを卒

カルテック大学院在学中。原子力の方の研究をやっているらしい。

三男の芳雄君（21）はペンシルバニア大学に在学中であるが、二月からカリフオルニア大学に移り、会計学を専攻する予定。

長女の聖子さん（19）はハーバード大学に關係のあるバーナード女子大学在学中。私の判取帳には立派なフランス語で歓迎の言葉を書いてくれた。この大学も女子のでは一番難しい学校だという。家の中では日本語と英語のチャンポンでことを進めている。

四男の芳造君（13）はまだ少しやん茶などころが残っているが愉快な坊やで、ママロネック・ホモック中学といふのに通っている。

とまあ以上のような訳で子宝に恵まれていればかりでなく、皆優秀な子供さんばかりで詰に羨ましい。

芳之君の一家が全部渡米したのは一九五七年だから、もう今年で一二年になる。ラーチモンはNY市の北の郊外、ウェストチエスター郡に属し、海岸に面した樹木の多い住宅地で、ヨット・クラブやヨット競争のあるので有名で、小説などにもよく出てくるところという。

商売はキッコーマン醤油の販売で、ソイ・

ソースがアメリカの多くの場所で愛用される

ようになつたのは、森脇君の活躍に負うところが多いようである。

会社の正式な名称は Kikkoman Inter-national Inc. と言ひ、同君はそのマネージャーである。モリワキといふのに米国人には発音していくとみえて、外国人にはミルウォーキーの方で通つてゐる。

私はそれからボストンへ飛び、アメリカ山岳会のカーターハン集長の別荘へ招かれ、エベレストの西稜を登つたアンソルドなどと起居を共にし、ワシントン山に車で登り、又ボストンへ戻つてハーバード大学をアン奥さんの案内を見学した。

又NYに戻りいろいろ森脇君及びその御一家に迷惑をかけてから、クリンチ（AACの会長）と共にワシントンからロスへ。こゝで

バンクーバーでは三井の桜内支店長の紹介でカナダ山岳会のパディ・シャーマンに会いその人の又の紹介で有名な女傑、フリス・マンデー夫人（68）と親しく言葉を交わすことが出来た。ロブソン峰の女性初登頂者であるマドリードから以前のことと余りかかなかつたが、今回は森脇君御一家のことを紹介するのが主眼だったので御勘弁願いたい。

クリンチとの旅はそれからバークリー、シアトルと続いたが、その間に一度私はネバダ州のリノへ飛び、大学のエチュバリーア教授を訪問した。彼はアンデス登攀史の大家であ

る。

バークリーでは七年前のファーカール老の家に又泊めてもらい、オーテンバーガー夫妻

にもその家で開かれたAACの支部総会でアツた。W・シリーには大学の食堂であつた。シアトルではエペレスト関係の大もの、エマースン、ホーンバイン、それにK2の勇者シェーニングにも会わせてくれた。

エプスタインに連れて行かれて、エペレストの頂上に三時間いた大男のホイットカーリーも見えたことも嬉しかった。

バンクーバーでは三井の桜内支店長の紹介でカナダ山岳会のパディ・シャーマンに会い

その人の又の紹介で有名な女傑、フリス・マンデー夫人（68）と親しく言葉を交わすこと

が出来た。ロブソン峰の女性初登頂者である

マドリードから以前のことと余りかかなかつたが、今回は森脇君御一家のことを紹介するのが主眼だったので御勘弁願いたい。

バンクーバーからアンカリッジを経て羽田についたのは一一月八日の午後八時四十五分、かくして五〇日に亘る嬉しいそして苦しかつた旅を無事終つたという訳である。

妙義・白雲 (四・七日)

妙義神社の枝垂桜を見に行つた（早すぎて一本だけ七分咲）ついでに四十六年目の宿願（大一年金鶏・金洞を登つたので白雲だけが宿題になつていた）を果した。見掛け通りの岩峯で多くの鎖場がある。

岩は堅く浮石の心配はない。白銀に輝く浅間が印象に残った。

杓子・忍野八海 (四・二八・二九日)

前年の晚秋、富士見ランド（会社の旅行）の観覽車から望見したピラミッド型の山に心引かれて調べたら、道志山塊の鹿留山と尻根続きの杓子山だった。登りかけて間もなく豪雨となり退却、翌日富士湧水池で名高い忍野八海をまわってみたが、湧水池にふさわしい姿は約半数で失望した。やはり富士宮浅間神社の湧玉池の壯觀にまさるものはない。

吉利山 (六・九日)

会社の青婦部に同行してつつじ見物に行つた。中腹の楓池の周辺は咲いていたが、頂上は蕾だった。直下まで、マイカーやマイクロが登る。二週間おいて、家内とその友

人を案内（タキシイ利用）して、満開のレンゲツツジを堪能した。見渡す限り炎の海

清水越 (九・八日)

の大群落。富士吉田口大石茶屋前のレンゲツツジが全滅（盗掘）した今日では、推賞に値する景観である。

平ガ岳 (七・二六・二九日)

往年の物凄いジャングルを拓いて、鷹巣部落（清四郎小屋完成）からの登山ルートができた（三九年完成）というので執念登山を敢行した。軽装でも上り六時間半（ネット）という長丁場であるが、途中（尾根筋）に二カ所水場があるので助かる。頂上は、名前通りの、奥利根の山特有の池塘をちりばめた広い草原で、山上のパラダイスである。天幕かシュラーフを担ぎあげて、是非

一泊するがよい。往復十四・五時間の日帰りでは、登りの苦労に対して申訳ない。清四郎小屋で言葉を交した一人の若人は、一週間滞在したと語った。

利根川側（八木沢ダム）へ下るコースが本格的に拓かれるのも近いのではないか。

五色・平・黒四 (八・一六・一九日)

五色原友田慰靈碑追悼行である。前号に書いたので重複は避けるが、十七日が迷走台風崩れでなかつたら、単独でも薬師へゆく

つもりだつた。

清水越 (九・八日)

「巻機へ行きませんか」と中島から声がかかったので、宿望の山でもあり、八月の五色山行で山田とも話合っていたので二つ返辞で出かけた。しかし清水に着くころから大夕立となつて一晩中降り続、朝になつて漸く晴れたので、中村（慎）ルートの米子沢は勿論、普通ルートでも日帰りは困難となり、コースを清水峠—七ツ小屋—蓬沢に変えた。信玄尾根から見た太源太山の岩峯がすばらしいので、二人は積雪期登行を企てるようだ。蓬峠を下り切つて蓬沢沿いに歩いていると、停つていたトラックが手招きする。

「若い者だけじゃ乗せねえが、大先達が居るから」

年功、トラックを走らす。敢てボッカたるを辞せざる者は出会え。

横岳（北八ツ・九・二三日）

ロープウェイの完成で、ロックガーデンから一時間足らずで頂上に起てる。南ア、木曾駒、北アの展望がすばらしい。亀甲池への逆落しは岩のゴツゴツした悪い径だ。

山麓に友人（松本）が山荘を建てたので、

良い根拠地ができた。彼も山登りが好きなので同行した。

杓子・鹿留山（一〇・二〇日）

春のリターンマッチである。前日がすばらしい秋晴で富士が石膏細工のように白く輝いて見えたので、気負いこんで出かけたが、生憎の曇り空に等雲がかゝる始末ですつかり期待を裏切られた。うつすら雪のきた南も望まれた。石割山へのハイキングコースから、僅か十分足らずの鹿留山頂は、ブナやナラの巨木にかこまれ、人影はおろか、紙屑一つない文字通り清浄無垢の秘境であった。山中湖のすぐそばにもこんな美しい山が残っている。

山伏岳（一二・一日）

安倍川奥の秘峯（二〇一三m）梅力島新田から井川へ越える牛首峠上のピーカ（約一八〇〇m）から山頂への四キロの尾根（緩い上り）は一面の緑原、ゴルフコースをゆくような山上のプロムナード。頂上からの富士、南アルプスの巨峰の大観は筆紙に尽しがたい。山中清浄無垢。新幹線の足代を償つて余りある山。降路逆落し、平地まで二時間、バス停まで一時間。梅力島温泉（水害復旧完成）に一浴して山行を試むべし。

会員の便り(2)

伯耆豊次

石原脩

子供が大きくなつたら、一緒に山登りと思つてゐる中にこちらが年を感じるようになつてしまつて、最近の銀座を歩くようなアルプス、エチケットを知らぬ若者達の車中の混雜さが嫌で、山にはとんと御無沙汰。日本のが、マッターホルンやモンブランをみに簡単に行けるようになつたら、孫でもつれて登りますか。

横山院一

丹沢三峯行 六八年十二月十四日

藤野一（バス）→東野→原小屋
十二月十五日 原小屋→丹沢山→丹沢三峯
ト宮ヶ瀬→（バス）→厚木

昔の尾根道が土地造成でえぐられ、三十米の岩壁で切られてしまつたからである。

豆の山を思わせる闊葉樹の藪ごきのすえ登頂したが林につゝまれた静かな山頂であった。明春にはルートをつけ、頂上の枝葉をはらつて見通しを良くしたいと思っている。

開山の晩には、多数の御来山を得たい。

東野を歩きだしたのは十六時、一時間ばかりで一同は用意の懐電を取り出した。昼間

の雨の残したガスが深いが雨に逢うこともなく予定どおり十九時小屋に着いた。小屋は我々だけの借切り。朝五時三〇分出発、小生十二月十五日に、二世が生まれた。風とガスが強い。蛭ヶ岳頂上で太陽が顔を出し、やがて全くの快晴。十二月というのに正月は赤倉にスキーに行く予定。

春のようなのんびりした尾根歩きだった。

北鎌倉駅の西面、円覚寺の裏手に六国見山（海拔一四六米）と云う山がある。

今夏建てた賃宅からこの山の二等三角点（三角標が珍らしくも健在する）まで、高差約七十米、距離三百米であるが、直登す

る道が無い。

会務報告

佐藤久尚

一、忘年会

日時 十二月十七日(火) 六時半～九時

場所 如水会館中集会室

出席者 中川孫一・吉沢一郎・河相薫・

手塚晴雄・増山清太郎・鈴木英雄・

柿原謙一・望月達夫・佐々木誠・

岩崎利一・山田亮三・久保孝一郎・

原田 豊・松下順吉・山崎拡・

横山暎一・上田駿策・中村正司・

石原 僥・山本健一郎・中村幸正・

丸山則二・中島 寛・石弘光・

大賀二郎・高橋信成・小島和人・

佐藤之敏・原 博貞・佐藤久尚・

中村雅明。

以上三十一名

暮れの繁忙時にとかわらず多数の会員が出席し、定員二十五名の部屋はせますぎる程だった。如水会館自慢のスキ焼きに舌つづみを打ちながら、山の話を肴に、皆大いにメートルを上げた。

当日、国際アルピニスト会議に出席され帰国したばかりの吉沢先輩が、帰国途中撮

影したスライドを上映、又、訪問した各国の有名なアルピニストの話等、興味しんしんであった。

九時、会館の閉館時刻となり、惜しみながら散会。参加者に、一昨年のヒンズークシユ遠征の写真パネルが一枚づつ配られた。

二、懇親ハイキング

(1) 高尾山

日時 一月十二日(日)

参加者 松下順吉、同子息・柴崎新、

同子息・山本健一郎・佐藤之敏

中村雅明

陣馬山へ懇親ハイクの予定だったが、当 日雨のため、参集したもののみで高尾山初詣で。

針葉樹会スキー
山行のご案内

左記により、恒例の懇親スキーを実施します。参加希望者は幹事まで御連絡下さい。宿泊は皆になじみ深い神城の下川又寛氏宅で、遠見尾根・小遠見までのツアーや、黒沢峠のゲレンデで鹿島槍をみながらひとすべりなど楽しい企画で盛り沢山です。

記

日時 一月十九日(日)

参加者 中川孫一・近藤恒雄・佐野茂雄

同子息・山本健一郎・佐藤久尚

中村雅明・(学生)宮武幸久。

中村雅明・(学生)宮武幸久。

先週と打って変って好天気、事情で参加者が少くなってしまったのは残念だったが、冬の低山ハイクを充分満喫した。

(なお詳細は別稿記事を参照して下さい。)

TEL (二二六)〇六一一

米幹事 中村雅明(三菱油化
計数室計数課)

石田信隆君(四十一年卒・三菱銀行勤務)
は、去る二月二日(日)、めでたくゴールインされました。如水会館で行なわれた被露宴には会員八名が出席し新生活のスタートを祝福いたしました。



